3.11 ソレカラ

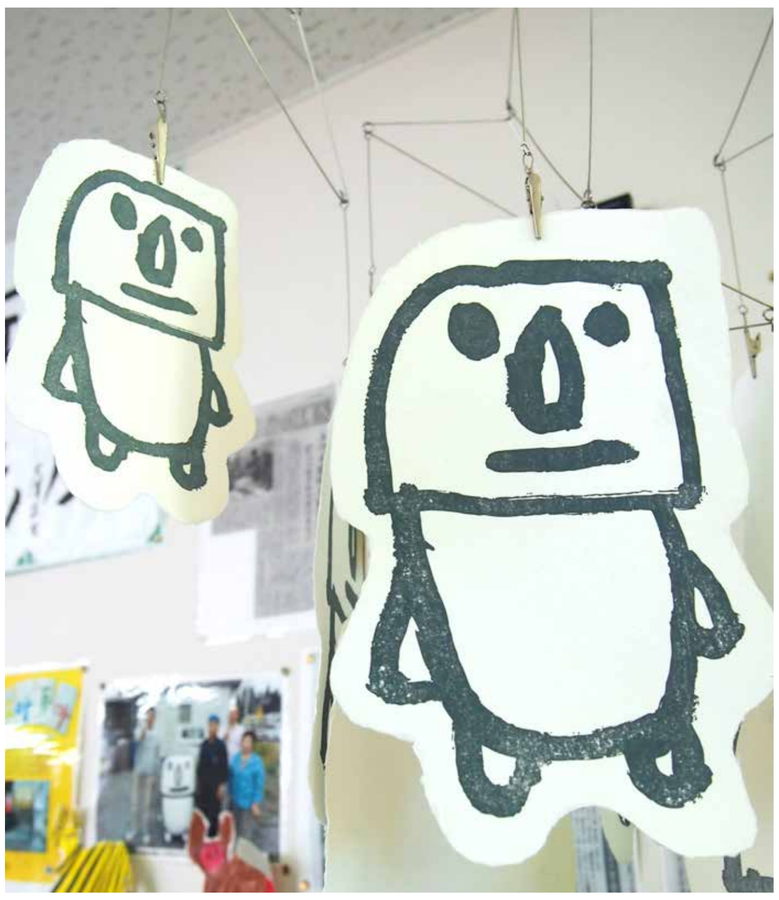
～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

誰かが誰かをつないで、「のぞみ」の復興を支援してくれた。

生活介護事業所　のぞみ福祉作業所②

◎職員：森伸也さん

― 紙漉きの様子 ―



― 紙漉き製品のモアイ ―

支援は　多くの支援が入り、紙漉き商品やモアイグッズが誕生。現在の活動の要に。

プレハブ仮設ながら5月に再開した「のぞみ福祉作業所」。震災前にあった町内企業からの委託作業はなくなり、活動は畑作業のみになりましたが、仲間が集まれるという喜びに全員がひたっていました。

作業所が再開する少し前、森さんは「日本障害フォーラム（JDF）」から派遣された方に出会いました。障害のある方のお手伝いをしたい、というのです。これを機に、北海道から沖縄まで、JDFを通してたくさんの支援員が週替りで作業所を訪れ、畑作業を手伝ってくれました。

畑作業が軌道にのると、今度は天候不良の日でも室内でできる活動はないかと考え、「紙漉き」をしようという案が持ち上がりました。この時に支援をしてくださったのが、「社会福祉法人 仙台市手をつなぐ育成会」と、社会奉仕団体の「世田谷ライオンズクラブ」です。紙漉きの機械やステンシルの道具一式を提供してくださったのです。

支援はその後も続きます。被災した障害者就労支援事業所等が集る会議の参加を通して、障害のある人のアートを社会に発信する「エイブルアート・カンパニー」と知り合い、「紙漉き」と「南三陸町のシンボル」を合わせた商品開発を行うことになったのです。利用者さんが描いた南三陸町のシンボル・モアイをアイコンにして、タオルなどのさまざまなアイテムが誕生しました。

こうして生まれたペーパーアイテムやモアイグッズの制作が、利用者さんの震災後の主な活動となりました。震災前の委託作業の時にはなかった「オリジナルの商品で売上をあげる」ことが可能になったのです。

感謝　困った時に寄せられた、人と人とのご縁に感謝。

森さんは震災後のこれまでを振り返り、支援をいただいた方々に大きな感謝の気持ちを抱いています。自分たちだけの力ではなく、利用者さんの家族やそのつながりから、あるいはニュースを見て南三陸町にかけつけた方など、多くの力が「のぞみ福祉作業所」に集まったと感じています。「誰かが誰かと自分たちをつなげてくださった。すごく恵まれているんですよ」と、人と人とのご縁を実感している森さんです。

変化　利用者さんの成長を感じる近年。今後は建物の建設も目指す。

震災後、利用者さんにもさまざまな変化がありました。多くの支援者が出入りしたことにより、人と関わることに積極的になった方がいます。写真を撮るのが好きなある利用者さんは、自分から相手に声をかけて撮影をすることができるようになりました。また、紙漉きなどの活動に自信と誇りを持って仕事に携わる利用者さんもいます。

一方で彼らの成長を促してくれた「のぞみ福祉作業所」は未だプレハブ仮設で、これからが本当の復興を目指す時です。利用者さんと職員は、商品の製造や周知と同時に、新しい建物の建設に向けて頑張っています。